

巻 頭 言

ヘルスカウンセリング学会年報編集委員会

編集委員長 小林 啓一郎

心の状態が身体にダイレクトに影響することには、がん、糖尿病、視野狭窄等に関係するカウンセリングを経験したカウンセラーは気付きやすい立場にあると言えるが、患者の中にも直感的に気付いている方が多い。このことに気づくことに最もためらうのは自然科学分野の研究者や、科学的であることを大切にする人々のようである。かくいう私自身、総合電機メーカーの研究職にあった経験がある。自然科学を職業とするための訓練を積むと、目の前の情報が信用に値するものかどうかを自然科学的視点で判断する習慣が身についてしまう。職業上必要不可欠ではあるが、どうも日常生活の中でもその習慣を無意識に使っているようである。

これは私の私見であるが、人間の発するサインのうち、客観的に捉えたり数値化できるものを“からだ”のサイン、本人の自覚として捉えられるものを“こころ”のサインと分けているようである。ここ数十年、超電導素子の登場のおかげで、微小領域の磁場や電流を極めて高精度に計測できるようになり、脳科学が飛躍的に進歩しつつある。この影響で、これまで“こころ”としてしか捉えられなかったものの一部が、“からだ”としても捉えられるようになった。しかしながら、この間に人間自体が変わったわけではない。このように考えると、自然科学、社会科学、人文科学等の区分はまったく暫定的なものであり、むしろ総合科学としての視点で人間を捉えるパラダイムが必要になってくる。私が、上司と部下の衝突のはざままでストレスを感じていたころ、大阪大学・医学部の森本兼曩先生が、テレビでストレスとホルモンの関係を説明されるのを見て、“こころ”と“からだ”の一体性について、自然科学研究を職業とする立場の者としてすんなり納得できた記憶がある。

このような経験から私は、“こころ”と“からだ”の一体性について、自然科学の立場の人々にも一層分かりやすい研究をする必要があるように感じてきた。それは、まずは自然科学的立場・手法を使って、“こころ”と“からだ”の一体性を研究し説明することであろう。その蓄積の上に、上記のようなストレス性身体疾患に対する真の対処法が見えてくるのではないだろうか。

そのような観点から今回の年報には、いつもがん抑制遺伝子の評価でお世話になっている、国際科学振興財団・バイオ研究所の堀美代先生にお願いし、笑うラットでの遺伝子発現を解明・実証した最先端の研究について特別論稿をお書きいただいた。自然科学論文を読む機会が少ない方でも、ラットをくすぐることでドーパミン関連遺伝子が発現することが実証された経緯を、その雰囲気を感じるつもりでお読みいただきたいと願っている。

2009年9月